

受付番号

留学・研究計画書

氏名 久我 麻梨子	留学機関名 東アフリカスワヒリ文化研究所
留学先国名 ケニア共和国	留学期間 西暦 2010年4月～2012年3月
研究テーマ ケニア海岸北部におけるバジュン・アイデンティティの政治的・歴史的動態 －スワヒリへの文化的同化と維持される民族性－	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>[本研究の背景と要請] ケニアは、ワン・ネイションというスローガンのもと、国内43民族集団間の文化的融合を順調に進めてきたとされる。しかし当国で2007年末、1500人以上の死者と約30万人の国内外避難民を出す民族対立が発生した。文化差異の縮小が民族対立の抑制に寄与しなかったケニアの例が示す通り、民族的アイデンティティをその集団の文化的特性に還元する従来の視点が限界を迎える今日、民族問題を現代政治的文脈において議論可能なものとするために、民族的アイデンティティの動態を政治的・歴史的な文脈から検討する新たな視点が要請されている。</p> <p>[研究の対象と目的] ケニア海岸地方の住民は、現在大きくスワヒリとミジケンダの両社会集団に分けられる。だが、スワヒリとミジケンダの分割は自然発生的なものではなく、1920年代に英国植民地政府が実施したスワヒリ優遇経済政策に伴って生じたものである。本研究の対象は、海岸北部のスワヒリの中核をなす民族集団バジュンである。バジュンは、言語や宗教など日常的実践においてスワヒリ文化を担いながらも、自らの「起源」の独自性を強く意識し、それを語ることによって民族的アイデンティティを創出する。本研究は、具体的に下の2点において、バジュンの民族的アイデンティティの歴史性および実態を解明したい。</p> <p>(1) シングワヤ伝承と前植民地アラブ支配下での奴隷制という「起源」をめぐる語りに立ち現れるバジュン民族的アイデンティティの実態および人びとの歴史意識を明らかにすること。</p> <p>(2) 「起源」をめぐる語りがバジュン・アイデンティティの重要な要素となった経緯を、植民地化・脱植民地化におけるケニア海岸北部の民族的アイデンティティ形成の政治的・歴史動態において解明するとともに、バジュンと近隣民族集団との相互関係を考察すること。</p> <p>[先行研究との関係] ケニア海岸北部の民族的アイデンティティ研究には、狩猟採集民ボニに関するフォルクナーの研究がある。フォルクナーは、モスク、屋敷、ブッシュの3空間をそれぞれイスラム教、イスラム教と伝統宗教の混合形、伝統宗教の実践に使い分けることにより、ボニがイスラム教受容後も伝統宗教実践を継続し、民族的アイデンティティを維持しているという興味深い指摘をしたが、そこには政治的・歴史的・地域的視点が欠けていた。本研究は、それらの視点を採用し、より大きな時間・空間の枠のなかで民族的アイデンティティの動態を捉えていく。</p> <p>[研究の学術的・社会的意義] バジュン・アイデンティティの形成をケニア海岸北部の政治的・歴史的な文脈において論じる本研究は、東アフリカ地域研究と民族的アイデンティティ理論研究の双方に、具体的事例とそれにより根拠づけられた新しい視点を提示すると同時に、文化人類学、政治学、歴史学間を領域横断的に研究する実践の一例ともなる。また、異文化対立として従来理解されることが多かったために根本的な解決をみてこなかった民族対立の問題に対し、現代政治的文脈における理解を示すという点で、社会的に重要な研究であると言える。</p>	

成果報告書

記入日 2013 年 1 月 18 日

氏名	久我 麻梨子	留学先国名	ケニア共和国	所属機関	東アフリカスワヒリ文化研究所、 ケニア国立博物館
研究テーマ： ケニア海岸北部地方におけるポコモ・アイデンティティの歴史的動態とその実態の解明					
留学期間： 2010 年 10 月 ~ 2012 年 12 月					
<p>【ケニア留学全体の感想】</p> <p>2年4ヶ月間の留学を終え、無事日本に帰国することができました。まずは、この素晴らしい機会を与えてくださった貴財団のみなさまに、心よりお礼を申し上げます。2年4ヶ月という長期に渡り調査国ケニアに滞在できたことは、これまでの短期現地調査で経験していた一次資料や現地の空気に直接触れるということからさらに一步踏み込みんだ研究上の経験を私に与えてくれました。また、私個人の人生においても非常に有意義な時間になったと思っています。</p> <p>わたしはこの留学期間中、アーカイブ調査と現地調査を組み合わせた手法で、研究テーマの解明に取り組んできました。アーカイブ調査を通しては、貴重な一次資料へのアクセスのみならず、ケニアにおけるアーカイブ資料の社会的・学術的位置づけなどについても学ぶことが多くありました。また、村に住み込みをしながらおこなった現地調査を通しては、四季を通じて変化する気候や風景、そしてそれらに伴い変化する人びとの生活の営みに自らも参加し、さまざまな経験を共にすることができました。調査地に滞在する時間と比例して、現地の物事のやりかたについての知識は増え、見えている世界の奥行きが増していく、それを実感として感じられた日々でした。</p> <p>留学期間を通しては、アーカイブ調査のための1ヶ月間の首都滞在と、現地調査のための2ヶ月間の田舎の村滞在とを交互に繰り返すスタイルを基本としました。このスタイルは、ケニアのアーカイブ事情のみならず、私自身にも大変よく合っていたように思います。ケニアのアーカイブは、資料情報はデータ化されているのですが、資料の保管の仕方が非効率的であり、且つその保存状態も悪いため、資料の観覧請求をしてから実際に体裁の整った資料が手元に届くまでに非常に時間を要することがままあります。そこで、次回観覧したい資料の請求をしてから調査地の村に戻るようにしたことで、手間をかけて資料観覧の準備をしてくれるアーキビストたちも、それを待つ私自身も、ほとんどストレスを感じる事のない、スムーズな作業体制を作り上げることができたように思います。また、現地語もままならないまま住み込みを始めた村の生活は、一般家庭には電気も</p>					

通っていなければ、近くの町へ出るにもらないまま住み込みを始めた村の生活は、一般家庭には電気も通っていなければ、近くの町へ出るにも公共交通機関で2時間かかるうえ、さらには強い日差しが1年中降り注ぐ続くという、これまで私が経験したことのなにかなり過酷なものでした。そのような状況の中、身体的な疲れをためこまないためにも、また、調査地での経験を相対化し、研究の過程の中に文脈化する時間を確保するためにも、2ヶ月間の村での生活のあとに過ごす首都での1ヶ月間は貴重な時間でした。同時に、狭い村の中での人間関係と物理的に少し距離をとる期間を設け、首都であったからこそできた研究上の人間関係作りができたことも、持続的かつ発展的な研究調査の実施のため、また自身のメンタル面での健康を保つためにも不可欠であったように思います。このような心身共に無理のない、複数個所を定期的に訪問する調査研究スタイルをとることができたのは、十分な留学期間があってこそそのものだったと感じています。

今回のケニア滞在が留学という形をとっていたことで、これまでの調査滞在とは異なる有意義な経験もたくさんすることができました。その中でも、留学期間の最初の4ヶ月間、所属研究所で基礎の基礎からスワヒリ語を集中して学べたことは、現地調査のみならず、ケニア生活全般においても、大いに役立ちました。調査地では、現地語を覚えるべく日々努力を重ねていましたが、文法書などがなかったため、習得に苦労していました。その際に、文法構造の似通ったスワヒリ語を学んだ経験によって、自分なりに文法構造等を解析することができ、現地語の習得をより効率的に進めることができました。また、たとえば教会などで歌われる賛美歌のほとんどはスワヒリ語であったり、学校教育は英語であったりと、村の人々自体が、現地語、スワヒリ語、そして英語を操るトリリンガルであり、調査地自体も多言語空間となっている状況の中、彼らと同じ3言語を使って生活できたことで、自身が身を置ける場所、また関わる人可以る人の範囲を広げることができました。首都滞在中には、研究に関してスワヒリ語を使用する場面はごく限られていましたが、あまり安全とはいえない街中や移動中などにおいて、周りの声が聞こえ、理解できる、ということで自身の身の安全を守ることができたのは、一度や二度ではありませんでした。自分の身を自分で守るための最低限の能力を身につけることは、特に国外で単身調査をする場合の最低限の責任の一部であると実感しました。

スワヒリ語を学ぶ以外にも、研究所に所属していたことにより、研究会や国際学会等の準備およびそれらへの参加といった機会にも恵まれました。アフリカ諸国の研究者との意見交換や交流を通しては、現在のアフリカにおける研究動向のみならず、彼らが学んできた人類学において私自身の研究がどう見えるのかということについても、示唆的な意見をもらうことができました。首都滞在中には、英国東アフリカ研究所など、世界各国の研究者が集まる研究機関でセミナーに参加したりと、欧米の若手研究者との人脈作りをすることもできました。自分では気づいていなかったケニア

研究における可能性や、現地との関わり方の多様さなどに気づかされると同時に、悩みを相談しあったり、情報を共有したりと、励ましあいながら研究に取り組むことができました。また、これからの研究にも生かすことのできる有益な関係を多く築くことができたように思います。

【】

1 ケニア海岸北部地方に居住するポコモ族

今回の留学で私が調査をおこなったポコモの人々は、ケニアの海岸地方北部を伝統的な居住地とする、人口7万人ほどの小規模なバンツー語系民族集団に属する人々です。この地域には、はるか西のケニア山から流れ出たケニア最長の川・タナ川が東のインド洋をめぐって流れており、ポコモの人々はその流域沿いを主な居住地としています。ポコモ族という名称が固定化したのは、1930年代に英国植民地政府が民族・人種の制定をおこなった後のことであり、それまで彼らは、ポコモもしくは「川の人々びと」と呼ばれていたようです。ポコモの生活圏には、最近の100年ほどの間は、半農半牧のオルマ族、「森の人びと」であるミジケンダ・グループのギリアマ族、ソマリアから南下してきたソマリ族、そして「海の人びと」であるスワヒリの人々などが隣人として存在してきました。私の調査地付近は、英国植民地政府および現代ケニア政治の周縁に位置し続けてきた経済的に非常に貧しい地域ですが、その民族的混血性は目を見張るものがあり、ケニアの人びとですら、「いったい何族がどんな風に暮らしているのか詳しい事情はわからない」言うほど民族的に混沌とした地域です。文化人類学的にみれば、ポコモを除いて、個々の民族に関する一通りの研究はなされており、それぞれの民族が自らの民族的アイデンティティを確立するために依拠している核心的な文化的特徴について明らかにされています。しかしながら、ポコモ族に関しては、他の近隣民族集団に比べて、その民族的アイデンティティの核心を担うような目立った文化的特徴が見られないとして、一体なにがポコモをポコモたらしめているのか、明らかにされてはきませんでした。このような状況を受けて、今回の留学では、ケニア海岸北部地方の民族的アイデンティティの歴史性と実態を解明する手始めとして、これまでほとんど人類学的研究の対象とならなかったポコモの人びとに焦点を当てることにしました。

2 近隣民族オルマとの伝統的協力／敵対関係

私が住み込み調査をしたガオという村は、人口1500人ほどが散々して住んでいる「(タナ)川のこちら側」にある村で、村の中心から8キロほど離れたところには同じく「川のこちら側」にあるゴルバンティという人口500人ほどのポコモの村があります。「川の向こう側」に住んでいるとされるのが半農半牧を伝統的な生業とするオルマ族の人びとであり、この両者は協力関係と敵対関係とが複雑に入り組んだ歴史的な関係を生きてきました。オルマは農耕に適さない土地が広がる「川の向こう側」に住んできましたが、かろうじて農耕可能な川の両岸は伝統的にポコモの土地とされてきました。両者の協力は、ポコモは川に沿って並ぶ自らの農地の合間合間に道を作り、オルマが彼らの牛たちを引き連れて川べりへ行き水を飲ませることを許し、一方のオルマは、自らが親しくするポコモ

家庭に定期的に牛乳と牛肉を提供するという形をとっていました。しかし、年2回の収穫期には、ポコモが育てた川沿いの農作物をオルマの牛が食い荒らすために両者の関係は一時的に敵対性を増し、その後次第に再び協力関係に戻っていくというサイクルを繰り返してきました。

3 変化するポコモーオルマ関係

長年にわたり続いてきた上述のポコモとオルマとの協力／敵対関係ですが、近年、特に2000年代に入って以降、この関係に変化が生じてきました。その主たる要因となっているのが、①土地所有権の法制化、②国会議員選挙における民族感情を利用した「民族対立」、③援助を介した農地利用法の変化の3つです。

まずはじめに、ケニア経済が援助バブルで大きく成長した90年代後半以降、ケニア全域において不動産価値が見直されたのに伴い、ケニア海岸北部でも同様に、これまで伝統的に、具体的には長老たちの記憶とそれに伴う判断により定められてきた土地の所有権が、ケニア国家の法律の下で定められるものへと移行する流れが生じました。土地の権利が、長老という共同体の道徳的象徴から共同体の各成員個人の権利下へと移行したことで、それまでオルマ共同体に対してポコモ共同体が提供していた川へのアクセス権に対する道徳的コンセンサスが崩壊し、農作物を荒らす牛とその持ち主のオルマに対し、ポコモの人びとは各自の判断で報復を与えるようになっていきました。共同体間の関係性が個人間のそれへと移行したことで、一度でもトラブルを起こしたオルマは従来とのポコモ家庭とのつながりも失くし、敵対関係・感情が両者間の主たる関係となっていきました。

次に、2000年代に入って以降、2001年、2007年、そして2012年と、大統領選挙と併せて実施される国会議員選挙に際して、他民族出身の対立候補に入る票を減らすことを目的に政治家たちが民族感情を煽り、民族間の暴力的対立を引き起こさせ、政策ではなく民族という所属意識に基づいた投票を行うよう有権者を仕向けてきたという流れがあります。ポコモとオルマとの間の暴力的対立は、「川のこちら側」と「川の向こう側」というそれぞれの居住区の線引きを更に明確なものとし、両者が同じ空間に居合わせるだけで緊張関係が生じるようになっていきます。

そして、ここ2年ほどの間で、国際援助団体が旱魃時の緊急支援としてポコモ居住区で開始した共同農耕プロジェクトに伴い、ポコモの名の下に耕運される土地が拡大したことにより、オルマは川の水へのアクセス権を更に失うと同時に、オルマ所有の牛によるポコモの農作物の被害は増大するという状況が生じており、両者の関係は現在、敵対感情を軸とした緊張関係にあります。

4 変化するオルマとの関係の中で確認され続けるポコモ・アイデンティティ

ポコモの民族的アイデンティティは、独立した文化的特徴に依拠しているというよりは、近接するオルマとの間の関係性の中で生じ、変化し、確認される、政治的なものであるというのが留学を終えた現時点での結論です。今後は、政治的アイデンティティに関する理論化の作業を進めていくながら、今回の留学に伴う調査で得たデータに基づく自身の現在の結論の有効性を再検討していく予定です。